



上智大学創立 100 周年
 上智短期大学創立 40 周年
 上智社会福祉専門学校 50 周年



サマーセッション

No. 24

1. サマーセッション・プログラムとは

毎年、夏休みの時期になると、日本文化を学びたいという海外からの学生が、上智大学サマーセッションにやってくる。7月の下旬から8月の中旬の3週間に、主に日本の社会、政治、経済、文化を中心に東アジア地域の経済・文化などを含めて、日本、アジアを学ぶことで、今日の世界的な視野を持つ人材を育成することが、サマーセッション開講の目的である。

カリキュラムは、2012 年の場合を例にとると、13 科目が開講されており、授業はすべて英語で行われる。これらの科目は、国際教養学部が提供している。「日本美術論」「日本経営論」「現代日本経済史」「日本史：江戸と東京」「日本語 1・2」「現代日本政治論」「東アジア文化の基礎」などが開講されている。

午前中は授業が行われ、午後は、各種のイベントに参加する。イベントでは、日本の伝統芸能である華道、茶道を体験したり、能、歌舞伎などを鑑賞する。また、明治神宮への参拝や和太鼓体験などのコースもある。

ちなみに、2011 年度では、最も受講者の多かった科目は、「社会学特講（現代日本社会）」で、午後のイベントでは、歌舞伎に対する関心が最も高かった。

講義は、大学設置基準に沿った授業時間をカバーし、受講生は 2 科目 6 単位まで修得することができる。そのため、大学生の場合、帰国後に所属大学で単位として認めてもらうことができる。参加費用は、160,000 円となっている。（登録料 20,000 円、授業料 140,000 円）

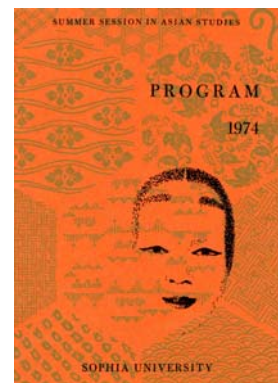
受講者は、国別にみると、アメリカが最も多く、次に中国やインドなどアジアからの留学生が多く、ヨーロッパ・アフリカなどからもやってくる。内訳は、個人参加者が最も多いが、交換留学生として受講するもの、アメリカに本部を持つ C I E E（非営利団体）を経由して来るもの、また、国際教養学部など上智大学生も受講している。



2011 年のサマーセッション、和太鼓の練習や明治神宮参拝

2. 2011 年で 50 年の歴史をもつ

サマーセッションは、上智大学の創立以来の伝統である東西文化交流の一端を担うプログラムであり、2011 年で 50 年を迎えた。これまでの総受講者数は 11,000 名を超えている。



1974 年度サマーセッション
 募集要項

サマーセッションは、1961年に始まった。日本に対する関心の高まりを反映して、当時の国際部ジョン・ブルーウエット助教授の提唱で始まった。その後長きにわたりサマーセッションの運営と発展に尽力したイエズス会のモーリス・ベイリー神父など国際部の教員が中心になって検討し、カリキュラムを組織し、同年7月中旬から8月中旬まで、5週間の日程が組まれた。サマーセッションは、既に多くの欧米の大学で行われていて、開講すれば、異文化教育・研究に対して高い評価を得ている上智大学にとっても有意義なプログラムになることが期待された。

プログラムは、現在と基本的に変わらない。ただし、受講者の内訳は変わってきた。創設当初は、主にアメリカの日本・アジア研究に携わる大学・高校の教員が多かった（下記写真参照）。現在は、主に大学生、大学院生の参加が多数を占めるようになった。

1960年代には、電気機器メーカーの工場見学、証券会社への訪問、鎌倉や日光への観光旅行なども授業の一環として組み込まれていた。また、各科目の試験終了後に、旅行会社のオプションツアーも設定されるようになり、各自希望に応じて1~2週間の国内旅行かアジア旅行（台湾、香港、マカオなど）にも参加できた。1970年代以降になると、日本の経済や技術が世界的に注目されるようになり、それまでの多数のアメリカ、カナダからの参加者にかわり、徐々に東南アジアからの参加者も見られるようになった。また、単位修得のために参加する国際部の正規生も増加してきた。

さらに国際部が比較文化学部へ昇格、その後現在の国際教養学部となり、同学部に在籍する留学生などの参加も目立つようになる。長年サマーセッションを統括してきたリチャード・ガードナー教授は、「海外の学生と上智大学の学生の交流が確実に広がってきている。今後留学生受け入れ数の増加に伴い、ますます重要な講座になる」と、サマーセッションの意義を高く評価する。

2009年に上智大学は、文部科学省の国際化拠点整備事業（グローバル30）に選ばれ、海外からの留学生のためのプログラムの一環としてサマーセッションの役割が期待されている。



歌舞伎、茶道、生け花などの講習も重要なプログラム（写真1961年～63年）。また、旅行なども行われた